かささぎ 通信 第78号

2019年 3月 8日 発行

どなたでもいつの会でも参加できます　　森三郎刈谷市民の会　「森三郎の作品を読む会」

二〇一九年二月の「森三郎の作品を読む会」では『森三郎童話選集かささぎ物語』（1995年、刈谷市教育委員会）所収の「ジャンケン橋」「姉」を読みました。

「ジャンケン橋」は先回読んだ「アオイの大臣」と同様に、単行本『幼年童話集　帽子に化けたクロネコ』（東京一陽社、昭和24年2月）に収められた作品です。村のはずれの「ジャンケン橋」と呼ばれる板橋のあたりで遊ぶ五年生の「宗ちゃん」と三年生の「三ちゃん」という隣どうしの二人の生活を描いています。「ジャンケン橋」は夜更けにその橋を通ると、ジャンケンぼうずが出てきてジャンケンをしようとせがむという言いつたえがあります。ジャンケン坊主はきまって「はさみ」を出すので、こちらが「石」を出せば勝てると分っていても、夜の闇の中をこの橋を通るときにはこわくてなりません。宗ちゃんはお腹をこわした三ちゃんのために自転車でジャンケン橋を渡って隣村のお医者さんを呼びに行きます。昼間の光の世界から夜の不気味な世界へと変わるジャンケン橋の描写は、子供の不安な気持を象徴しています。読者の子どもたちの鼓動さえも聞こえそうな感じです。宗ちゃんは「エンヤラエンヤラ櫓拍子そろえて」とありったけの声を張り上げてジャンケン橋を通り過ぎます。これは尋常小学校四年生用の唱歌「漁船（りょうせん）」の冒頭部分だということを会員の水野日出夫さんから教わりました。三郎さんも子どもの頃、この威勢の良い唱歌を歌っていたのでしょう。「ジャンケン橋」という名前も現在の刈谷市小垣江町の猿渡川にかかる「巡見橋」の名が変化したと作品中に説明されています。『刈谷市史』には明治18年に巡見橋は土橋から板橋になったと書かれています。三郎さんが育った刈谷の昔の様子を彷彿させる童話です。

なお「ジャンケン橋」は「ジャンケンハシ」と濁らずに読んだ方が良いのかもしれません。「巡見橋」の親柱の銘板にも「じゅんけんはし」と清音で書かれています。会員の鈴木哲さんの話から、橋の名前は、橋の下の川が増水し濁ることを嫌って清音で読むことが多いということを知りました。会誌『かささぎ』2号（5頁）で酒井晶代先生が書かれていたように、「集団で読むこと」によって一人で読んでいたのでは見逃していたような気づきが、今回はいくつもありました。

「姉」の初出は、昭和22年4月号の『銀河』（少年少女雑誌、新潮社）です。『銀河』は左綴じ・横組みの雑誌で、作者名は「モリサブロウ」、主人公の名も片仮名で書かれています。この話は五年生のサンヤのお姉さんがお嫁に行く時の様子を描いています。「サンヤのうちに、動かすことのできない大きな運命のかわりめを持ってきた自動車」に乗ってお姉さんはお嫁いりしました。自動車が走り去った後の夕焼け雲がかかった空や、うっすらと夕もやが立ちこめた町の描写などから、いつもはふざけ合っていたお姉さんがよその人になってしまうという寂しさが伝わってきます。ただ「月がかげってさびしくなった町つじ」（『森三郎童話選集　かささぎ物語』213頁）というのは不自然だという声が出ました。昭和25年の『日本児童文学選　年刊第二集』所収の「姉」では「日がかげって淋しくなった町辻」と直されています。森三郎の作品の載った蔵書には、しっかり校正して原稿を直した跡が残っていることがよくあるので、これも気づいて「月」ではなく「日」に直したのでしょう。また「今にいいお嫁さんをもらって働かせる」と大人がサンヤを冷やかす場面があります。終戦直後と現在の感覚の違いが話題になりました。

姉にまつわる童話としてこの「姉」と「三国峠」（『赤い鳥』昭和9年10月号）は、森三郎の実体験を元にして創作した作品だろうと思われます（会誌『かささぎ』第3号「森三郎と兄妹たち」神谷磨利子、「かささぎ通信」第49号参照）。

次回「森三郎の作品を読む会」（第二金曜日に刈谷市中央図書館で開催）

二〇一九年四月十二日（金）午後一時半～三時半

「赤いポスト」「秋蝉」（『森三郎童話選集　夜長物語』）